

「義に飢えかわいている人」

イザヤ書  
マタイによる福音書

第55章 1節～5節  
第5章 6節～7節

説教 岡村 恒牧師

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。」(6節)主イエス・キリストが山の上で大勢の人々にお語りになった〈山上の説教〉の一節です。

聖書は、私たちが本当に満たされて満足を得ることができるかと語ります。主イエスはこの日、集まって来た人々をご覧になって、「飼う者のない羊のよう」(マタイによる福音書 9章36節)な様子を、深くあわれんで語られました。「こころの貧しい人」、「悲しんでいる人」、「義に飢えかわいている人」、というのは本来、幸せとは思えない人たちです。欠乏は不安や悲しみを与えるからです。主イエスは、飢えかわいている者、欠乏を知って悲しむ者はさいわいだと言われました。必ず満たされると言うのです。

「義に飢えかわく」という時の「義」とは、神様との関係を言い表す言葉です。神ご自身はすべてのものに満ちておられて、何の欠乏もありません。そして義なる神は、私たちにも義であるように、欠けのない者であるようにとお求めになります。そしてそのために律法を与えて神の民を生かそうとされました。しかし、旧約聖書全体が明らかにしているように、神の民はこの求めに答えることができませんでした。私たちがまた、自分自身に義がないこと、神の前に立つ資格がないことを知らされています。

主イエスは、食事の席で奇跡を行い、罪人と呼ばれる人々と共に食事をなさい、飢えかわいている人々を満腹にされました。5千人の飢えた人々にわずかのパンと魚を分け与えた時、「みんなの者は食べて満腹した」(14章20節)と聖書は記録しています。主イエスにすがりつくように集まり、主イエスだけを見つめる人々を、主イエスは満たしてしまわれたのです。その食事はあふれ出る食事となりました。

主イエスは、私たちが欠乏に心を奪われて生きていることをよくご存知でした。「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらう」(6章31節)私たちの姿をご覧になり、満腹の約束をお与え下さいました。2002年の大阪教会標語は、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(6章33節)でした。思いわずらう私たちは、本当に必要なものが分からずにいます。何が欠けているか、何を求めたら良いかさえ見失ってしまいま

す。主イエスはそのような私たちに、神の国と神の義とを求めたら良い。そうすれば神ご自身が私たちを満たして下さる、と約束して下さいました。

本当の飢えとかわきについては、神が、聖霊の助けによって示して下さいなければ、私たちには分からないのです。神との関係に重大な欠けがあり、どうしても埋めることのできない断絶があることに、私たちは気づくことさえできません。だからこそ、主イエスはあの十字架の上でさえ、私たちのために「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカによる福音書 23章34節)とお祈り下さいました。主イエスはこの欠けについて、〈ふたりの息子を持つ父の話〉(放蕩息子の譬え)を用いてお話しになりました。(ルカによる福音書 15章参照)父のもとを離れた放蕩の末に、あらゆるものを失った欠乏の中で、この放蕩息子は「本心に立ちかえって」(17節)父の元へと帰って行きました。父はこの息子を待ち続け、遠くから発見して走り寄り、抱きしめます。私たちが父なる神の愛を失い、神に抱きしめられる平安を手にしていないことをご覧になり、主イエスは憐れんで下さったのです。そして、私たちを満たすために招いて下さいました。私たちは、神に赦され、神に立ち返る以外に、決して満たされることがないのです。

7節に「あわれみを受ける」という約束が記されています。憐れみというのは神の憐れみの話です。あの十字架の上で、もっとも激しい仕方でも表されたのがこの神の憐れみです。神が憐れみ深い方であること、この憐れみの中で生かされていることを知る者は、神の憐れみを豊かに受けて生きるようになるのです。

主イエスは、み前に集まった私たちの魂の奥底をご覧になりながら、「さいわいだ」と宣言して下さいます。神の義に欠けていることを知り、飢えかわいて、神の憐れみの前に立つあなたがたは、確かに神に満たされて生きるようになるのだからさいわいだと言われるのです。神の赦しと恵み、祝福を受けて満たされるようになるからです。満たされると、私たちの人生のどの場面、どの瞬間にも、神以外のものが入り込む余地などなくなります。神の憐れみを受けて、飽き足りる満足の中で歩みましょう。

(記 岡村 恒)